

終助詞の機能について  
- 伊勢方言の二の用法の記述と「よ」との比較 -

服部 匡

0 はじめに

近年、特にヨやネのような終助詞の機能を明示的に記述しようとする試みが行われるが、未だその性質が十分な形では解明されていない終助詞も少なくない。共通語に機能的に対応するもののない終助詞として伊勢方言の二がある。本稿は二の機能の分析記述を目的とするものである。

伊勢方言の終助詞体系については佐藤虎男氏による優れた記述が既にある(1976)。佐藤氏が二を、「信すべき情報を提供しようとする姿勢の訴えことば」とし、働きを「『教示』であり『告示』である」とされるのは二の性質をよく言い表しているが、本稿では二の機能を、音調による機能分化をも含めてより明示的に記述しこれが本質的に具体的な聴き手に向けての発話を前提とするものであることを述べる。更に共通語の「よ(↑、↓)」<sup>1)</sup>の機能との共通点、相違点に触れる。このことは、間接的に、「よ」の機能をより十全に理解することにも役立つのではないかと思う。

1 伊勢方言の終助詞二

1. 1. 二の分布、歴史

終助詞二は、三重県伊勢地方等に分布する。<sup>2)</sup>本稿の記述は昭和32年生まれて中勢地方、久居市に18才迄居住した筆者の内省に基づくが、久居市の老年層の話者の報告をも参考にした。

終助詞二は歴史的には恐らく接続助詞の二に起源する(佐藤(1976)、彦坂(1991)参照)が現在接続助詞としての二は一般に用いられない。<sup>2)</sup>

1. 2. 二の概略

二の二種類の音調を簡略に二↓、二↑と表記する。<sup>3)</sup>

二は、(1)、(2)のような平叙文の他、(3)のような勧誘(～しよう)、(4)のような否定的勧告(否定形+ヤ、例：センヤ=しなさんな)などで用いられる。<sup>4)</sup>命令文、疑問文等には後接せず、ヤロ(だろう)にも後接しない。二に他の終助詞が後接することも普通ない。<sup>5)</sup>

(1) 危ナイニ↑

(2) マー、ナットカ ナリマスニ↓  
(何とか)

(3) ハヨ イコニ↓

(早く行こうよ)

- (4) イランコト 言ワンヤニ↑ (余計なことを言いなさんなよ↑)  
ソナナコト 言ワンヤニ↓

なおニは間投用法(佐治(1957))は持たない。つまり文末にのみ生起する。

佐藤(1976)に次のようにあるが、実際、ニは基本的には友好的な会話において用いられ、丁寧な会話や、子供に優しく語りかけるような場面には特にしっくりする。

全年層の男女に盛んである。女のほうにより盛んなものがある。[中略]  
品位は、わるくない。親しいもの言いの中に一定の品位を保つ。丁寧な文にもよくおちつく。

## 2 ニの機能

本稿では主として平叙文でのニを問題とする。

### 2. 1 ニの音調と機能

さて、平叙文でのニの機能を、音調別に共通語の終助詞と比較すると次のようになる。

- (5) ニ↑ --- ヨ↑にやや近い機能を持つ。ヨ↑の方が用法は広い。

ニ↓ --- ヨ↓とは機能が異なる。共通語に類似の終助詞はない。

分かりやすい例を一つあげる。

- (6) ソナトコニ 入ッたら アカンニ↑。  
(だめだよ)

上の文は例えば公園の柵の中に入ろうとする子供に注意するのに用いられる。この文は「よ↑」を用いた(7)と大きな違いはない。

- (7) そんなところに入ったらだめだよ↑

一方「よ↓」を用いた(8)は例えば既に柵の中に入った子供に注意する場面で用いることができる。(6)、(7)も(8)も、一種の制止として機能しうる点では同じである。

- (8) おいおい。そんなところに入ったらだめだよ↓。

ところが(6)のニ↑をニ↓に換えて(9)のようにすると、これは(8)のような制止の働きはしないのである。

- (9) ソナトコニ 入ッたら アカンニ↓

これは例えば、子供同志の会話において、「そんなところに入ることはきつと良くない(あるいは、禁止されている)ことである」と相手に教示する場面で用いられる。このような性格の終助詞は、共通語にはない。

ニの機能を音調別に示すと、およそ次のように言える。

- (10) Pニ：Pという事柄を相手に教示する。

P二↑：相手が認識すべき事柄Pを示しPへの注意を喚起する。

P二↓：原理的には相手自身が知ることが可能な事柄Pを示す。

以下、共通語の「よ」との対比という観点を交えながら二の機能をより具体的に検討していくことにする。

以下、「よ」を二に変えると不自然になるという例については便宜上共通語の形で示す。厳密には「文の他の部分を必要に応じて当方言の形に直した上で、『よ』を二に変えると不自然になる」という意味に解して頂きたい。

## 2. 2 二と対他性

二は基本的には聴き手への情報の提示において用いられ、独言において用いられないことがない。

終助詞のついた文を独言的に発話する場合について一般的に考えると、そこには少なくとも二種類の場合が認められる<sup>6)</sup>。

「よ↓」は詠嘆のような場合に独言的な姿勢で用いられることがある。例えば、(11)や(12)のように、無人の荒野の中で一人わめくといった状況を考えてみる。

(11) ああ。寒いよ↓

(12) 痛いよ↓（または、痛い「よ」ー）

ここでは、一応漠然とした外界に向けての発話という姿勢は認められるものの、具体的な聴き手は現実にも、話者の意識中にも存在しない。

一方、(13)、(14)のように独言的に言う場合を考えると、(11)や(12)の場合とはやや異なって、むしろ自分自身に向けて語りかけるという姿勢が認めらる。前者のケースを独言A、後者のケースを独言Bと仮に呼ぶことにしよう。

(13) あれ。変なものが落ちてるぞ。

(14) 困ったな。こりゃ。

ある終助詞を伴った文が独言Aとして、あるいは（および）独言Bとして発話されるかは、その終助詞の種類と音調の両面から制約される。

例えば、「よ↓」とは対照的に、「よ↑」は普通具体的な聴き手の存在を前提し、独言Aとしても独言Bとしても用いられ難い。

(15) 危ないよ↑

(16) そうだよ↑。知らなかったの？

(17) 別にそのことをどうこう言うつもりはないよ↑、ただね---

(18) 君が責任者なのだよ↑

伊勢方言の終助詞二は、独言Aとしても独言Bとしてもまず用いられることはない。つまり、具体的特定の聴き手の存在を前提すると言える。

## 3 二↑について

### 3. 1. 「よ」が二に置き換えられる場合

「よ↑」は多くの場合二↑に置き換えられる。その機能は近いと言ってよい。二↑に置き換えられる「よ↑」の例をまず考えることにする。

例えば聴き手がよく知っているはずのことへの注意喚起(19)、聴き手が知っていると一応は考えられるが念のため注意喚起するという場合(20)、聴き手が誤解しかねないことについて予め注意喚起しておくといった場合(21)などがこれに当たる。

(19) 君が責任者なのだよ↑

(20) (御存じでしょうが)ここに車を停めては困りますよ↑

(21) 別にそのことをどうこう言うつもりはないよ↑、ただね---

また、新たな情報を提示してそれへの注意を喚起する(22)や(23)のような場合も同じである。(24)のように、話者自身にかかわる、聴き手に未知のことを示してそれへの注目を促すという場合もある。

(22) (予報によると)明日は台風が来るらしいですよ↑

(23) ねえ。知ってる? 山田が結婚するんだよ↑

(24) 私、ホノルルマラソンに出たんだよ↑

また、(25)、(26)のように相手が今知って有益な事柄への注意を促す場合もあり、(27)のように一種の警告となったり、(28)のような自分の行動の予告(時には更に進んで相手の何らかの対処の促し)になる場合もある。いずれにしても一種の教示と注意喚起の働きをする。

(25) 危ないよ↑!

(26) そんな格好では寒いですよ↑

(27) そんなことを言うと怒るよ↑

(28) もう帰るよ↑

佐藤氏も、「二のもちかけ訴え[は]、信すべき情報を提供して相手の注意を喚起するのを本領とする」と指摘しておられる。

### 3. 2. ヨ↑が二↑に置き換えにくい場合

これは、伝えられる事柄の内容によるというよりも、それを発話する姿勢に規定される。一言で言えば、注意の喚起という積極的な(いわば親切的な)働きかけを伴わず単にある事柄を言い放つといった姿勢の場合や、もともと聴き手にその情報を受理しようとする構えがありわざわざ注意を喚起するまでもないという場合などである。

まず、下記のように、軽く突き放すような調子で発話する場面で、二はまず用いられない。(筆者は共通語の音調に通じていないが、(29)-(30)のような「よ」は、上昇調というより川上(1963)のいう「末端卓立調」に近づくのではないかと思われる。<sup>71)</sup>

- (29) -ねえ。ファミコン買って。  
 -だめだよ↑
- (30) B:そういうことをするとたたきがあるぞ。  
 A:本当?  
 B:うそ。冗談だよ↑<sup>81)</sup>

さらに一般的に言って聴き手の問いかけに単純に答えるような場面で二↑は通常用いられない(もし用いたとすれば、例えば、相手の想定が誤りであることに注意を促すといった特別なニュアンスを生じる)。

- (31) -これ、使っている?  
 -うん。いいよ↑
- (32) -どこに行ってきたの?  
 -スペイン村だよ↑

聴き手が願う事柄の成立を請け合うという姿勢の発話もこれに近い。(33)や(34)のように請け合う内容が話し手の推量である場合、二↓なら可能だが二↑はおかしい(もし用いれば前項同様特殊なニュアンスを帯びる)ように感じられる。

- (33) (今日はあまり良いことがなかったというあなたも)明日はきっといい日になりますよ↑ (放送終了時のメッセージ)
- (34) きっとお嬢様もお喜びになりますよ↑

#### 4 二↓について

次に二↓について述べる。先にも述べたように二↓は「よ↓」とは機能が異なり、これに当たる終助詞は共通語には存在しない。

##### 4. 1. 二↓が用いられない場合

これは一言で言えば、他者(より正確には、現時点以降の話者自身も)は原理的に、話者以上に確かにPということを知るのが困難な場合である。なおわざわざ「原理的に」というのは、たまたま現実世界のありかたに制約されて、話者一人が知りうるどころとなったというような事柄であっても二↓の使用には差し支えないことがあるからである。

##### 4. 1. 1. 話し手は直接的にPという事柄を知りえ、聴き手や第三者は原理的にそれができない場合

例えば現在の自分の内的状態(感情、感覚など)、意志、評価などを直接的に他者が知ることは原理的にできない。本人の報告によるか、外的に現れる兆候などによって間接的に知る他はない。そこで次のような場合「よ↓」は可能だが二↓は用い難い。用いるとすればワであろう。この点は服部(1992)でも指摘した。

- (35) (病状を聞かれ)

頭がずきずきしますよ↓

(36) うるさいな。もうわかったよ↓

(37) 私もそう思いますよ↓

(38) もう帰るよ↓

(39) (料理を一口食べて)

おっ。うまいよ↓

オッ。ウマイ ×ニ↓

ワ↓

ところで感覚や評価に係わるものであっても、それを聴き手（あるいは第三者）も同等に確かなものとして感じたり評価したりすることが可能な場合にはニ↓を用いることができる。(40)や(41)がこれに当たる。食べ物の味や人物への評価は言わば共有のものとすることができるからである。

(40) 食べテミナ。ナカナカ ウマイニ↓ (知らせ)

(41) アイツワ タイシタ ヤツヤ ニ↓--- 知らせ

ワ↓--- 詠嘆

同じ(42)の場面でもbのようにワを用いれば「一万円は負担が過ぎる（から貸せない）」という直截な感想の表明となるが、aのようにニを用いると、「あなた自身（や他の人）にも確かめられる客観的事実として一万円は負担だと思われる」と知らせる意味合いになり、より間接的な断りとして機能する。

(42) (一万円貸してくれと言われ)

a 一万円ワ エライ ニ↓

(負担だ)

b 一万円ワ エライ ワ↓

#### 4. 1. 2. 知識表明文などの場合

話者が既に知識としてもっている情報を判断を伴わずに表明する場合、すなわち、田野村(1990a, b)のいう「知識表明文」の場合、ニ↓の使用は制約されている。

例えば次のような「のだ」文を考えよう。田野村(1990b)によると、「のだ」は「背後の事情」や「実情」を表すという基本的な意味機能を持ち、そこから派生して、「既定性」、「承前性」、「披瀝性」などの特性を持つ。例えば(43)は、例えば地面が濡れていることを受けてその背後の事情を述べる文であるが、この文は知識表明文としても、推量判断実践文(田野村(1990a, b))としても用いることができる。推量判断実践文とは、「その文を発すること自体が判断を下すことに相当する」(田野村(1990a))ものである。

(43) これは雨が降ったんです。

ところが(43)にニを付加したものに当たる(44)は、推量判断実践文<sup>9)</sup>としての解

積のみが自然である。「よ」の場合とは異なる。

(44) コレワ 雨ガ 降りマシタンヤニ↓

そこで、次のように、「実は」などを伴ったりあるいは文の内容からして、知識表明文としか解しにくいような「のだ」文では「よ」を二に置き換えるのが困難である。

(45) 実は私も同じ経験があるんですよ↓

(46) (外国から今日着いた人に)

実は昨日大きな地震があったんですよ↓

(47) 噂では、太郎が結婚するらしいんですよ↓

(48) 明日が私の誕生日なんですよ↓

既定の事実として話者に知られている事柄というのは、言いかえると、いわば確からしさが100%であって、他のだれであれこれ以上に確かに知る余地はないとみなされているものである。

「のだ」文に限らず、(49)、(50)のように知識表明文としか解しがたく他者がより確かに知りようのない場合には二↓を付加できない。

(49) 違いますよ。私は日本人ですよ↓

(50) 私、もうここに住んで30年になりますよ↓

また、話者の発見や想起を表す文なども、やはり二を付加することができない。これらもいわば確度が100%のこととみなされる。

(51) ありゃ、こんなところにあったよ↓

(52) おや、もううぐいすが鳴いているよ↓

(53) よく考えたら今日は薬を飲んでなかったよ↓

#### 4. 2. 二↓が用いられる場合

これには次のような種類がある。

##### 4. 2. 1. 推量判断の文など

例えば、次のような推量判断の文では、他者も何かの根拠を得たならば同じ判断を下しうるし、より端的に事実としてそれを知るに至ることも、原理的には可能なことである。こうした場合は二↓を用いる。

(54) アノ人、ドーモ 結婚スルミタイデスニ↓

(55) (様子からして) アノ人ワ ロシア人デスニ↓

推量判断される内容は別に過去のことに関わるものであっても差し支えない。

(56) (話し手聴き手共に事故を目撃して)

ーアノ運転手、助カッタヤロカ？

ーアレワ 死ンダニ↓

(57) (相手の傷跡を見て)

コレワ 何かデ コスッタンヤニ↓

ニ↓の文はしばしば「それはあなた自身が実際知るに至るであろう」と請け合うようなニュアンスを生じる。(58)-(60)のような文は、いずれ聴き手はその真偽を知るに到る事柄を述べている。(61)も、聴き手が自分で真偽を確かめうることである。

(58) (医者が患者に) 二三日モシタラ 直リマスニ↓

(59) (ハイカーにどのくらいで目的地に着くかと聞かれた地元の人が) 二三分デ 行ケマスニ↓

(60) 太郎、明日来マスニ↓

(61) (この自転車は乗れるかと問われ) コレワ 無理デスニ↓

この、「聴き手自身がPということを実際に知るに到ることを請けあう」という用法が実はニ↓の用法の中核であり、それが拡張して、実際に聴き手が知るかどうかはともかくその原理的な可能性を示すという用法になるものと見ることもできる。

上の(59)や(60)のような文は、たとえ、話し手にとってはこの場での判断というより既に持っている知識であっても、聴き手や第三者が例えば実際に明日太郎に会うことでそれをより確かに知りうるためニ↓が用いうる。次の文は、素人の助言なら可能だが税務の専門家のような立場の者ならニ↓を用いないと思われる。

(62) (買い物に税金がかかるかたずねられ友人が)

5万円マデナラ カカラヘンニ↓

また、既に触れたが、他者が実体験によって、より確かに知りうる事柄を知らせるにはニ↓が用いうる。

=(40) 食べテミナ。 ナカナカ ウマイニ↓

(63) (外出しようとする人に)

外ワ 寒イニ↓

#### 4. 2. 2. 確実でない知識を表明する場合

例えば「確か」のような語を伴って、あるいはそうした表現は伴わずとも、その知識が確実ではないという姿勢で述べる場合にはニ↓を用いうる。

(64) (太郎の誕生日を聞かれ)

確カ モー 済ミマシタニ↓

#### 4. 2. 3. その他

次の例のように、自身の体験や直接眼前に観察した過去のことの報告において、ニ↓の使用が可能な場合がある。ただ、(65)、(66)は、観察したことの報告といっても、例えば地震の揺れ方を「すごい」と形容するような評価や判断の側面を伴う。(65)は東京から来た地震学者に報告するような場面を考えるとぴったりする。



(65) (地震の様子をよその人に報告)  
ココラワ スゴイ 揺レ方デシタニ↓

(66) (病人の様子を聞かれ)  
昨日ワ 元気ソーデシタニ↓

一方、次のように、自分が観察した過去の事態を何の判断も伴わずに単純に報告するという場合には、二の使用は困難なように感じられる。

(67) (地震の時の状況を聞かれ)  
?ウチノ 裏ノ 塀ガ コケマシタニ↓

なお、自分自身の内的感覚に関するものであっても、過去の体験の報告であるなら、二↓が用いられる場合がある。<sup>10)</sup>

(68) (過去の出産時の状況を聞かれ)  
ソラ 痛カッタデスニ↓  
(それは)

この場合は、「他者も同等以上に確かなこととして知れる」ということの例外になるが、自分自身の体験ではあってももはや記憶上のことでもあり、あたかもその情報に対し独占的な立場にはないかのような姿勢での発話であると考えられる。

#### 4. 3. 二↓のまとめ

以上をまとめると、二↓は、原理的には現在の話者以上に確かな知識として保持するのが可能な事柄にのみ用いられると言って良い。<sup>11)</sup>

ところで、(59)のように、実は話者にとってかなり明らかな事柄を一步退いて、聴き手自身がより確かに知りうることとして示すことは、一種の丁寧さにつながる。従って、特に丁寧体の二の使用は、目上の者などに物事を丁寧に、謙虚な姿勢で知らせるといった場面には適する。また逆の見方をすれば、他者にも知れる領域まで踏み込んで、できるだけ相手に意味ある情報を与えようと努める姿勢をとることが、一種の親切さや親しみの態度を感じさせることにもなりうる。

## 5 結論

以上、二↑と二↓の機能を観察した。さて、二↑と二↓に共通する二の特性をどのように考えたら良いであろうか。P二↑でもP二↓でも既に述べたように基本的な二の機能は情報の教示である。

P二↑においてはその音調の特質から、注意喚起の働きが加わる。すなわち、Pを事実としてまさにこの場での認識を促すことになる。一方、二↓では、Pは相手自身知る余地のあることを示して終止する。

「よ」については既に多くの先行研究があり<sup>12)</sup>、ここで私見を述べることは控えるが、二との比較によって、次の点が明らかのように思われる。第一に、「よ」は、

平叙文の場合に限っても、二の場合のように文内容と話者との関係（その内容が話者にとって既に安定した知識として保持されているものであるか、今推量判断されることであるかなど）の面からの制約を受けることは特にはない。<sup>13)</sup> 第二に、「よ↑」は、必ずしも注意喚起といった積極的な働きかけを伴うわけではない。第三に、「よ↓」は、必ずしも具体的な聴き手の存在を要求しない。

なおここでは、二↑と二↓の機能といった形で論を進めたが、より正しくは、少なくとも一度は、終助詞の固有にもつ意味機能と、音調の談話上の機能とを分解して考えなければならない。これを本格的に行うには、音調的側面を含めた終助詞体系全体の分析が必要となる。

[付記] 本稿の基礎になる内容を1992年7月3日の語彙研究会（於奈良教育大学）で発表した折、木川行央氏より「よ」の独言的用法についてご指摘いただいた。お礼申し上げます。

また、本稿の内容の一部は、1992年度以降同志社女子大学学芸学部卒業研究、および、同短期大学部の日本語日本文学演習の授業に参加した学生（とりわけ武田真理子、西村朱代）との議論、情報提供に負う。記して謝意を表する。

#### 注

1) 「よ」の音調的変種を「よ↑」「よ↓」と簡略表記する。「よ↑」は、およそ、轟木（1992b）のいう「上昇調」を、「よ↓」は同じく「同じ高さにつく下降調」と「低くつく平坦な音調」とを表す。すなわち、「よ↓」は、前要素に対して低接であれ順接であれ、自然下降に従う、またはそれ以上に下降する音調をとるものである。

2) 佐藤（1976）には「やや古風」と注記して次の例があげられている。

ベッサクト アカンニ ヤメトキー（へこむとだめだからやめときなさい）。

3) 二の音調の特性を示す。式の音調などに関しては、上野（1989）、中井（1990）の京都方言の記述を参照されたい。「は高起式（平進式）、しは低起式（上昇式）を表し、「は上昇、しは下降の音調変動を表す）。

二は次のように、前の要素に低接する（ただし、二↑では、二が卓立されて通常より高く始まることありうる）。

(69)	あかん	「アカン	「アカン」ニ	
	寒い	「サ」ムイ	「サ」ムイニ	
	書く	レカ「ク	レカ「ク」ニ	(cf. レカク「ヒ」ト)
	書いた	レカイ「タ	レカイ「タ」ニ	(cf. レカイ「タ」ヒ」ト)
	歩いた	レア「ル」イタ	レア「ル」イタニ	

二↓は自然下降に従うかそれ以上に下降する。二↑は自然下降に逆らう。

4) 勧誘の形には二↓しか付かない。また、否定的勧告の形に付く場合二↑ならば

典型的には未実現の聴き手の行動に対して、ニ↓ならば現に聴き手のとった行動、または、行うことが既定であるとみなされる行動を捉えての発話となる。この点は共通語の「よ」が禁止の形などに付く場合と対応する（田野村（1990b）、井上（1993）等を参照）。

5) ただ、これらのことに関しては地域・話者により相違がある可能性がある。例えば～ニナ（ニ+終助詞ナ）のような形は地域や話者によってはあっても不思議でないと思われる（これとは別に、「ソーヤニ、ナー」のように、「ソーヤニ」の発話相手とは別の第三者に同意を求めることはある）。ヤロニの形がないのも、あるいは偶然の欠落であるかもしれない。なお、勧誘の形に後接する場合には、ニサの形が可能である。

ところで、服部（1992）で扱った「わ」の接続関係について一点付言する。共通語で「だろう+わ」の形が存在しないことにモダリティ上の制約といった必然的な理由を求める見解は森山（1995）などに見られる。が、方言や過去の用例には「だろう+わ」相当の形が実際に見られることから、むしろ偶然の欠落と見なすべき可能性も直ちには否定できないように思われる。

6) 終助詞なしの文も含めて考えると、思わず口をついて出る「あ、痛!」、  
「しまった!」などのように、より純粹に独言的な発話が観察される。

なお、服部（1992:p12:116）の「純粹の独言として用いにくいという点を別にすれば」という注記は不必要であったので訂正する。

7) 川上（1963）に、普通の上昇調（第一種）と末端卓立調（第四種）の相違について次のようにある。

第四種の「書くね。」は「まさか君は書かないとは言わないだろうナ。書くのが当然なんだゾ。」というのにも近い押しつけがましい態度を表す。一方、第一種の「書くね。」は、「君は書いてくれると私は思うが、そう思わせてくれるかい?」というように遠慮がちに自分の判断に対する相手の承認を求める態度を表す。（引用終り）

また、第一種の音調は、「相手とのつながりを求める気持ち」を表す旨指摘されている。

8) ただし(30)の場面でも第三者のCが「今のは冗談だよ↑。信じたらだめだよ↑」のように教え、注意喚起するような場合ならニ↑を用いる。

9) より厳密には、そのように推量判断されることを知らせる文と考えられる。この点は以下断らない。

10) 筆者自身はこのような場合にニ↓を用いることがあるか内省がはっきりしないが、用いる話者もある。

関連して、渡辺（1991）によると「随分」のような副詞は「ひとごと」の表現を

志向し(70)のように話者自身の現在の感覚や感情の報告に用いられにくい。ただ、(71)のように過去の体験の報告にすれば(70)に比べ自然度が向上するように思われる。

(70) 私は随分苦しいよ。

(71) 私は随分苦しかったよ。

11) 「情報のなわ張り理論」(神尾(1990))のような見方を仮に取るならば、Pニ↓はPを話し手の領域外の情報として扱うことの標識であると言えるかもしれない。

12) 例えば、白川(1992)、大曾(1991)、田窪(1992)、金水(1993)、井上(1993)。

13) 最近出た井上(1995)にも、「ヨの汎用性」という指摘がある。

補注) ニという形の終助詞は静岡県遠州地方等にも存在するが、その機能がここで述べるものと同じかどうかは、未詳である。

#### 引用文献

- 井上優(1993) 「発話における「タイミング考慮」と「矛盾考慮」—命令文・依頼文に例に—」 『研究報告集14』 国立国語研究所
- 井上優(1995) 「方言終助詞の意味分析—富山県礪波方言「ヤ／マ」「チャ／ワ」—」 『研究報告集16』 国立国語研究所
- 上野善道(1989) 「日本語のアクセント」 『講座日本語と日本語教育』 2 明治書院
- 大曾美恵子(1991) 「「でしょう」、「よ」とイントネーション」 『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』 1
- 川上葵(1963) 「文末などの上昇調について」 『国語研究』 16
- 神尾昭雄(1990) 『情報のなわ張り理論—言語の機能的分析—』 大修館書店
- 金水敏(1993) 「言語学の最新情報<日本語学>:終助詞ヨ・ネ」 『月刊言語』 22-4
- 佐治圭三(1957) 「終助詞の機能」 『国語国文』 26-7
- 佐藤虎男(1976) 「方言文末詞の記述—三重県鈴鹿市江島町の方言の文末詞—」 『方言研究叢書』 第7巻 三弥井書店
- 白川博之(1992) 「終助詞「よ」の機能」 『日本語教育』 77
- 田窪行則(1992) 「談話管理の標識について」 『文化言語学—その提言と建設—』 三省堂
- 田野村忠温(1990a) 「文における判断をめぐって」 『アジアの諸言語と一般言語学』 三省堂
- 田野村忠温(1990b) 『現代日本語の文法I—「のだ」の意味と用法』 和泉書

院

- 轟木靖子（1992b） 「東京語に文末詞の音調と機能についての考察－「よ」を中心に」 『日本語・日本文化研究』 2
- 中井幸比古（1990） 「式の音調に関する二三の問題について」 『香川大学教育学部研究報告』 第I部 79号
- 服部匡（1992） 「汎性語の終助詞ワについて」 『同志社女子大学学術研究年報』 43－IV
- 彦坂佳宣（1991） 「東海西部地方の原因・理由表現－愛知県方言の分布と歴史ノート（7）」 『名古屋・方言研究会会報』 8
- 森山卓郎（1995） 「ト思ウ、ハズダ、ニ違イナイ、ダロウ、副詞～φ」 宮島・仁田編『日本語類義表現の文法』 くろしお出版
- 渡辺実（1991） 「「わがこと・ひとごと」の観点と文法論」 『国語学』 165

（はっとり ただし、同志社女子大学短期大学部）

**Functions of sentence-final particles:  
'Ni' in Ise dialect and 'yo' in standard Japanese**

**Tadasu Hattori**

**Summary**

This paper aims at describing the basic functions of the sentence-final particle 'ni' used in Ise dialect (Mie prefecture) particularly in comparison to 'yo' in standard Japanese. From a prosodic point of view, two types of ni can be distinguished, namely, ni ↑ and ni ↓, and they show different pragmatic features. Ni ↑ roughly corresponds to yo ↑ in standard Japanese, while ni ↓ has no functional counterpart in standard Japanese and can be characterized as a marker of information that can be known to the hearer and others as well as to the speaker.